

時の世界と人間の認識

— 英語・スペイン語・ルーマニア語時間表現への認知言語学的アプローチ —

福森 雅史・森山 智浩

1. はじめに¹

人文科学においても、哲学や社会学といった諸領域では「『時』とは一体如何なるモノか」という研究が盛んに行われてきた。たとえば、社会学者の見田宗介氏は著書『時間の比較社会学』の中で、「①反復的時間」（＝原始共同体に見られる時間）・「②円環的時間」（＝ヘレニズム文化において見られる時間）・「③線分的時間」（＝ヘブライズムの文化において見られる時間）・「④直線的时间」（＝近代社会において見られる時間）という4つの時間感覚の歴史的変化を表している²。一方、言語学・言語文化学の領域に目を転ずると、筆者たちが知る限り、「『時』とは一体如何なるモノか」という研究の発展度はその限りではない。その中でも、George Lakoff and Mark Johnson (1980, 1999) の両著ではそうした研究の萌芽が見られるものの、以下(1)－(3)の点において、十分な研究成果を得る上での理論的発展・改良の余地があると言わざるを得ない。

- (1) 「言語の側面から見た時間世界は3次元の空間世界で捉えられている」(cf. Lakoff and Johnson (1999: 143, 153, 160-161)) や「我々は時の概念を創造し、in や at を用いて自然にしかも無意識に時に関する事象を概念化している」(cf. Lakoff and Johnson (1999: 167)) という主旨は記されているものの、それはあくまでも時間世界としての全体的構造について言及しているのであって、3次元に至るまでの段階的諸次元（つまり0次元・1次元・2次元）が如何に時間世界の認識に活用されているのかについては光が当てられていない点。
- (2) 「時の経過を具現化するのに2種類の時の流れが存在し、それらは互いに一貫性がない。また、それぞれの概念化は図と地の反転で捉えられる」(cf. Lakoff and Johnson (1999: 149)) という主旨は記されているものの、そうした図地分化の反転が「観察者(observer)」と「時(time)」のいずれが移動物として捉えられるかという認識にしか焦点が当てられていない点。換言すれば、メタファー理論の枠組みでは抽象世界／抽象物の一側面が具象領域の特性でもって照らし出される

のだから、それら根源領域の実体も踏まえた上での図地分化の根本的要因を見つめ、その反転を引き起こす認識上の一貫性を導き出す必要がある。また、そこに「視点の移動」の導入が図られていないが故に、時間表現に関する厳密な区別が行われ難い点³。

- (3) 「英語における2種類の時の経過のメタファーは英語以外の言語にも観察される」(cf. Lakoff and Johnson (1999: 150-151)) という主旨は記されているものの、直訳しただけで英語の時間表現とそのまま対応する語句で解釈できる事例しか扱われていない点。そうではなく、「英語以外の言語にも同様の認識が存在する」というのであれば、表面上、直訳関係が成立しないように見える異言語表現であっても深層には同様の認識が存在している場合の実証も行わなければならない。さらに、それが如何なるプロセスを経て各々の言語における表現の違いとなって現われているのか、という大脳認識のメカニズムを明らかにしなければならない。もちろん、あらゆる自然言語に同様のメタファーが存在していると言っているわけではなく、あくまでもその実証可能性を探る必要がある。

そこで、以下ではまず、英語の時間表現に着目し、上記(1) - (2)の問題解決を試みる(§2 - §3)。その後、スペイン語・ルーマニア語各々の時間表現に着目し、§2 - §3で導き出された時間世界認識を基に、上記(3)における大脳認識のメカニズムの一端を明らかにすることを試みる(§4 - §5)。なお、§4 - §5では、「異言語間における言語表現の対応関係は必ずしも1対1の直訳関係ではないものの、その背後に広がる言語文化認識は『人間』という同じ生物として共通している場合も少なくない」という「人間言語文化」(=国境のない言語文化)の言語観を導入する(cf. 森山・福森 他(2010: 395-416))。たとえば、英語・スペイン語・ルーマニア語各々の事例である下記(4) - (6)では、言語様式という容器は異なるものの、その中身からは一貫して「過去」が「後方」の空間関係づけで捉えられる人間言語文化が観察される⁴。

- (4) ago ◆ ME *ago(n)* (p.p.) ~ *ago(n)* to go, pass < OE *āgān* to pass away : ⇒ A², GO¹.

— 『英語語源辞典』(s.v. *ago adj., adv.*) (下線・一部省略筆者)

- (5) Lo encontré años atrás.⁵
it (I) found years backward

→ 英訳(直訳): I found it years BACKWARD.

→ 英訳(意訳): I found it years *ago*.

(6) Cu mulți ani în urmă am avut un accident mare.⁶

with many years in behind (I) had a accident big

→ 英訳 (直訳) : I had a big accident with many years in BEHIND.

→ 英訳 (意訳) : I had a big accident many years ago.

誤解のないように述べておくが、本稿の主たる目的は、時の実像に関する Lakoff and Johnson (1980, 1999) の研究成果を上回ろうとするものではなく、ましてや否定しようとするものでもない。そうではなく、以下 (7) に示されるように、時に関する研究は、大脳・思考・言語における互いの関連性を明らかにする上で重大な意義を持ち、かつ、そこには経験主義に基づくアプローチが重要な役割を果たすことを鑑み、言語研究者としてその使命の一端を担って愚直に邁進することにある。

(7) The study of time, even within the limits of the metaphorical concepts we have, is a magnificent and enormously useful enterprise. But it is an enterprise that requires serious empirical study of the brain, mind, and language.

— Lakoff and Johnson (1999: 169)

2. 英語前置詞表現に見る時間世界と次元の論理

2.1. ゼロ次元認識のメタファー的拡張

2.1.1. 物理的「一点」概念

物理的場所表示名詞句と共に用いられる at, in について、以下 (1) では、その「広さ」を基に各々の語用が対比されている。

(1) at は基本的に点として考えられる狭い範囲の場所 (ホテル, 劇場, 駅など) を、in は広い範囲の場所 (国, 山, 広場など) を指す。

— 『ウィズダム英和辞典』 (s.v. at, *prep.* 1)

しかしながら、次の (2 a-b) では at, in 共に後続する名詞句が同一場所を指示することから、上記 (1) の捉え方だけでは両者の語用の差を説明する十分条件には至らない。

(2) a. She arrived *at* Kansai International Airport.

b. She arrived *in* Kansai International Airport.

ここで、下記（３）－（４）に見られる認知言語学の分析手法を導入する。

（３）認知言語学の本来のスタンス

人間の経験主義的立場を重視する。身体運動や五感機能を通して得られた日常経験が言語に反映されていると考えるスタンス。以下２つの領域写像に基づく。

・ 根源領域（source domain）：

我々の生身の肉体を通して、または自身が属する文化・社会的環境との相互作用を通して得られる物理的「経験」。

・ 目標領域（target domain）：

人間は無意識でありながらも、或る規則に基づいて言語の概念を捉え、運用している。このような認知的無意識の中で、上記の基盤から得られる多様な物理的経験を生かし、人間がどのようにして外界や抽象世界を認識しているのかを明らかにする。これ以外は認知言語学の守備範囲としない。

（４）認知言語学の本来の目的

メタファーとカテゴリー化の二つの理論を主幹とする認知言語学の根本は、人間を人間たらしめる経験主義に根ざした「大脳活動内における概念メカニズム」の正体をその結果事象である言語表現という側面から解明することにある。

— 森山（2011: 133（116））

以上の見解に基づけば、意味変化には物理から抽象へのメタフォリカルな認識が存在しているのだから、たとえば次の（５）に示されるような物理的「一点」概念が *at* の中核に据えられていると考えられる。

（５）She was robbed of her mobile-phone *at* knife point.

したがって、“Look *at* the building!” のように発話される時は、建物全体を「一点」として捉えることが意識上で可能な「或る程度離れた所から」話者が見る状況が必要となる。「目の前の」空いているテーブル（席）に相手の目を向けたい場合に、“Look *at* the free table!” とは言わずに、たとえば、“Look! There is a free table *there*!” と表現されるのも、この「視覚を通して一点化の収斂が可能かどうか」という距離の差が関係しているのである⁷。

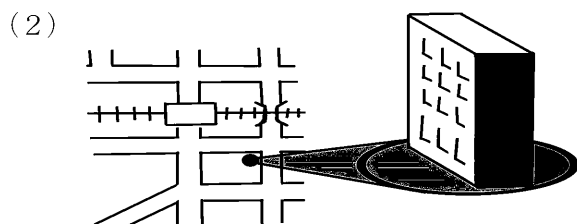
2.1.2. 地図上の「一点」概念

しかしながら、2.1.1.(2a) で見た station の指示物が物理的「一点」の次元で存在することは通常あり得ない。故に、ここでは以下(1)に見られるメタファー的拡張が生じていると考えられる。

- (1) In the phrase *at the door*, the door is envisaged as a dimensionless location, a vague ‘point on the map’, and no details concerning its shape or size come into focus. This is dimension-type 0.

— Quirk et al. (1974: 308) (下線筆者)

つまり、2.1.1.(2a) が発話される前提として、発話者は「駅」を「地図上の一点」で捉えていることになる。さらに、この「一点」で捉えられている「駅」を現実世界の事物に還元すると、建物それ自体だけではなく、「その付近も含めた領域」が還元される。次の(2)がその捉え方の一例である。



したがって、2.1.1.(2a) の *at the station* が現実には「駅の内部 (inside the station)」を指すのか「外部 (outside the station)」を指すのかは不明であり、「駅の内部」と明確に言いたければ、*She arrived in / inside the station.* と表現されなければならない⁸。

以上の理由から、「0次元」として地図上で一点化の収斂が不可能な事物には、必然的に *at* を用いることができない。下記(3)がその一例となる⁹。

- (3) She arrived $\left\{ \begin{matrix} *at \\ in \end{matrix} \right\}$ America.

2. 2. 一次元・二次元認識各々のメタファー的拡張

以下 (1 a-b) に示されるように、英語前置詞 *on* の中核には物理的「線／面への接触」概念が据えられている。

- (1) a. He is standing *on* the white line.
b. He is standing *on* the roof of the house.

Lakoff and Johnson (1999: 31) では、*on* の概念は IN CONTACT WITH, SUPPORTED BY, ABOVE の3つの意味要素から複合的に成り立つとされているが、その中心的役割を果たすのは依然として IN CONTACT WITH である¹⁰。なぜなら、たとえば次の (2) における参加者の位置関係は、「上・下」関係ではなく) 通常 (2') のように解釈されるからである。

- (2) The village is *on* the lake.
(2')

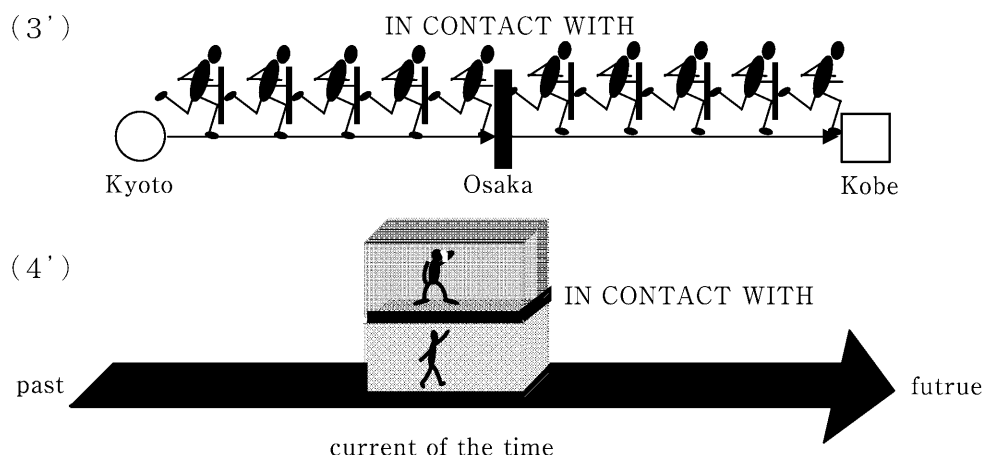


このような「接触」概念が「連続」事象へと拡張した事例が下記 (3) であり、さらに、時間世界へと拡張した事例が以下 (4) である。

- (3) He ran from Kyoto to Osaka, and ran $\left\{ \begin{array}{c} * \textit{on} \\ \textit{upon} \end{array} \right\}$ from Osaka to Kobe.
(4) $\left\{ \begin{array}{c} \textit{On} \\ \textit{Upon} \end{array} \right\}$ arriving there, he telephoned me.

(3) では、「前の動作／状態とその後の動作／状態とが接触し、さらに一つひとつの動作／状態が水平方向に接触していく」ことによって「連続」概念へと変化している。このように、水平方向へと接触していく認識の存在は、[up + on] に由来する *upon* が (3) では使用不可となる事実が物語っている。他方、(4) は「時間軸上の同時点に2つの事象が積み重なる」概念で捉えられる同時表現であり、したがって「上」方向に積み重なって

いるのだから, [up + on] の upon も使用可能となる。各々の概念的捉え方は下図 (3') - (4') として表される。



2.3. 三次元認識のメタファー的拡張

一方, 2.2.1. (2b) でも見られた英語前置詞 in の中核には, 通常, 「空間内部における位置／運動」もしくは「空間内部への移動」(≡ into) の概念が据えられている。事実, 以下 (1) の前後のコンテキストが不明な場合, 「彼は部屋の中で歩いた」のか「彼は部屋の中に歩いて入った」のかが明確とならない。

(1) He walked *in* the room.

ただ, いずれにしても「3次元空間」認識がそこに反映されていることから, 次の (2) のような場合であっても, 同様の認識が生きている。

(2) They stood *in* line all night to get the tickets.

実は, ここでの in line は “in the form of a line” (一列の形(態)で) として捉えることが可能であり, 「形態は三次元空間の概念で捉えられる」という認識が働いている。同様の認識は下記 (3) - (4) にも当てはまる。

(3) They died *in succession*.

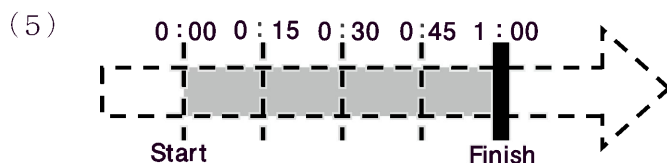
(4) I finished it *in an hour*.

つまり、概念上、*“in the form of”* (～の形(態)で) のコンセプトが反映されており、コンテキストの中でそれぞれ、次の (3') - (4') として解釈されることになる。

(3') They died *in* [the manner of the] succession.

(4') I finished it *in* [the span of] an hour.

逆に言えば、「様態；物事の状況や状態 (manner)」・「スパン (span)」は「三次元空間 (in)」で捉えられるモノであり、「それをどのような形態で利用するのか」という解釈が反映されているのである。なお、(4)、(4') は「時」の世界に言及する表現である以上、過去から未来への「時の流れ」の影響を無視することはできない。つまり、下図 (5) に描かれるように、1 時間の空間全体が「地」として捉えられると同時に、時の流れによって「最終時点のみが焦点化」される「図」の認識が存在しているからこそ、「1 時間経って」と解釈されるのである¹¹。

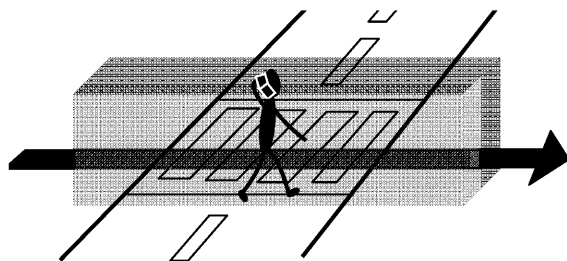


そして、このような「3次元空間認識」が行為そのものを媒介とした時空認識として変化した事例が下記 (6) である。

(6) *In* walking across the street, he telephoned me.

下図 (6') に描かれるように、たとえ屋根や壁に囲まれていなくとも、ここでは TR の歩行によって呈される移動経路が「空間」概念で認識されており、日本語の「最中」と同様の時空認識が反映されているのである。

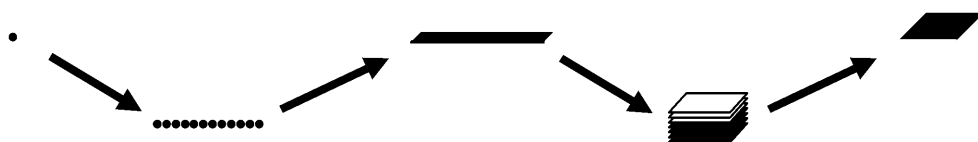
(6')



2.4. 時の世界と次元の論理

2.1. - 2.3. では、0次元から3次元までのそれぞれの認識を表示する英語前置詞の意味変化を観察した¹²。ここで注目すべきは、以下(1)に示されるように、これら次元の相関関係が「点が集まれば線／面になり、面が集まれば空間になる」という論理で捉えられることにある。

(1) 一点 - [複数の点が集まる] → 線／面 - [複数の面が集まる] → 空間



つまり、THE SPATIAL TIME メタファーとも言うべき比喻のフィルターが機能することによって、同様の次元論理が時の世界にも必然的に当てはまることになる。以下(2)がその詳細である¹³。

(2)

at : 「一点」



点の集合が線／面になる

on : 「線／面」への接触



面の集合が空間になる

in : 「三次元空間」

at eight o'clock (時点)



時点の集合が1日になる

on Monday



1日の集合が1週間になる

in a week / month / year...

3. 時の世界と図地分化

3.1. 「時」に言及する種々のメタファーの相関関係

§ 2では、英語前置詞 at, on, in 各々の中核概念に基づく意味変化を中心に、「次元の論理」の観点から、時の世界に関する人間の認識を観察した。このような空間文法的観点から時の世界が概念化される認識は、以下（1 a-b）の概念拡張にも観察される。まさに、認識世界上、人間は「物理的場所」と「時間的場所（＝抽象的場所）」の2つに身を置いて生活していることが伺えよう¹⁴。

- (1) a. I will see you [at somewhere] *between* Osaka and Tokyo.
 b. I will see you [at some time] *between* 5 and 6 o'clock.

しかしながら、時の世界は何も場所論理の観点からしか概念化されるわけではない。たとえば、次の（2 a-b）に示されるように、「金」の観点、すなわち TIME IS MONEY メタファーを通して概念化される場合もある。

- (2) a. He $\left\{ \begin{array}{l} \textit{spent} \\ \textit{wasted} \\ \textit{invested} \end{array} \right\}$ a lot of money studying abroad.
 b. He $\left\{ \begin{array}{l} \textit{spent} \\ \textit{wasted} \\ \textit{invested} \end{array} \right\}$ a lot of time studying abroad.

これは、「金」に対して人間が持つ「有限で貴重な資源」の認識を利用して時の世界が概念化されている実例であるが、下記（3 a-b）になると、その様相は一変する。

- (3) a. The medicine *cured* me of the heavy cold.
 b. Time *cured* me of the childhood trauma.

Cure の主体は本来「薬などの治療物／医者などの治療者」であり、TIME IS A HEALER という比喩のフィルターを通して時の世界が概念化されていることが観察される。つまり、“Time *heals* all wounds.” と表現されるのも、「薬」などに対して人間が持つ「治癒性」の認識でもって「時」という抽象物が捉えられているからに他ならない。

そして、ここで重要なことは、以下（4）－（5）である。

(4) 抽象物（ここでは「時」）は具象物（ここでは「物理的场所／空間」／「金」／「薬」など）が持つ概念でもって捉えられる。

(5) a. 抽象物を或る具象物で捉えるとき、その具象物が持つ概念でもってその抽象物への認識となる「一側面」が照らし出される。

例) TIME IS MONEY メタファー

(「時」の一側面である「貴重で限りある資源」という認識が「金」を通してスポットライトを浴びる。)

b. 逆にいえば、その抽象物への認識となる「一側面」が照らし出される場合、それ以外の側面は「背景化」される。

例) TIME IS A HEALER メタファー

(「治癒性」という認識がスポットライトを浴びる。その時、TIME IS MONEY メタファーが持つ「有限で貴重な資源」という認識などは背景化される。)

したがって、§ 2で観察した次元の論理、および、前出(1)で見た場所論理のメタファー的拡張が生じるとき、TIME IS MONEY メタファーを通して前景化された「有限で貴重な資源」の認識やTIME IS A HEALER メタファーを通して前景化された「治癒性」の認識などは、背景化されることになるのである。

3. 2. 時の二重性における根源領域の図地分化

§ 2および3. 1. で見た「場所論理に基づく時の世界の概念化」は時の経過とまったく無関係というわけではない。ここでは、まず、時の経過の概念化について観察する。

Lakoff and Johnson (1980: 44) では、時の経過について、以下(1)の二重性(duality)が指摘されている¹⁵。

(1) What we have here are two subcases of TIME PASSES US: in one case, we are moving and time is standing still; in the other, time is moving and we are standing still.

このような二重性は、異言語間にまたがって共通して存在する場合が多い¹⁶。たとえば次の(2 a-b)の日本語例ではそれぞれ、上記(1)の方向性に沿った概念化が観察される。

- (2) a. 先日はお世話になりました。／後日お会いしましょう。
b. 先々のことを考えて行動しなさい。／後ろを振り返るばかりが人生じゃない。

Lakoff and Johnson (1999: 149) では、これら各々の時の方向性について「時の経過を具現化するのに 2 種類の時の流れが存在し、それらは互いに一貫性がない。また、それぞれの概念化は図と地の反転で捉えられる」という主旨が記載されている。しかしながら、メタファー理論の枠組みでは抽象世界／抽象物の一側面が具象領域の特性でもって照らし出されるのだから、それら根源領域の実体も踏まえた上での図地分化の根本的要因を見つめ、その反転を引き起こす認識上の一貫性も存在していると考えられる。つまり、一見互いの関連性が感じられなくとも、前者が「減算方式」、後者が「加算方式」で捉えられる観点を導入することで、各々を形作る根源領域に基づいた図地分化認識およびその反転認識が存在している、というメカニズムである。その詳細を下記 (4) - (5) としてまとめる。

(4) 「時が過ぎ去る」自然時間 — 減算方式の捉え方

a. 捉え方の基盤：

- ・或る地点から別の地点まで移動するとき、必然的に「時の経過」を要する。そして、その移動の際、視覚の錯覚から、周りの景色が「過ぎ去っていく」ように見える。この「過ぎ去っていく」視覚経験と「時の経過」とが相まって、上出 (1a) の捉え方が形成された。
- ・通常、人／物に備わっている「時」とは有限の量で捉えられる。たとえば、人間は不死ではない。或る寿命を迎えることで人生を全うすることになる。ということは、寿命を 70 歳とするならば、その死点を出発点として持ち時間 70 年分の 1 年 1 年が「減っていく」ことになる。

b. 具体的考案物

- ・「持ち時間の減算方式」で「時」を捉える装置として、「砂時計」が発明された。

c. その他の言語事例

- ・ The time for action has *come* here.
- ・ The summer vacation *flew* past.
- ・ the *following* day

(5) 「時が刻まれていく」人工時計時間 — 加算方式の捉え方

a. 捉え方の基盤：

- ・上記(4)の「減算方式」は、持ち時間の最終時点から必ず逆算しなければならず、時の経過を「数量化」する上で不便である。そこで、逆に誕生時点を出発点として見なし、「時」が「加算」されていく、と考えたのが上出(1b)の捉え方である。
- ・寿命を70歳とするならば、その到達点に向けて、出発点である誕生時点から1年1年の刻みでもって「増えていく」ことになる。

b. 具体的考案物

- ・「加算方式」で「時」を捉える装置として、「針時計／デジタル時計」／「カレンダー」などが発明された¹⁷。

c. その他の言語実例

- ・ She is looking *forward* to the Christmas day.
- ・ The origin of the word dates *back* to the Edo period.
- ・ Jimmy: They must be an advanced species, millions of years *ahead* of us.
— *Jimmy Neutron: Boy Genius* (『天才少年ジミー・ニュートロン』)
(2001) < 00:51:14 > ¹⁸ (イタリック筆者)
- ・ Hooks: Can you think *back* for me to the morning of September 8th, the morning after your husband purchased the Jurgensen farm, one week before his death?
— *Snow Falling on Cedars* (『ヒマラヤ杉に降る雪』) (1999)
< 01:05:48 > (イタリック筆者)

事実、上記(5a)で見られた減算方式から加算方式への移り変わりは、次の(6)における言語現象とも並行する。

(6) [The waterlevel of] the pond is *running* short.

つまり、“[the waterlevel of] the pond” が指示する「池の水面」の高さが低くなっていく事象が前景化されるならば、減水量の「加算方式」で捉えられる一方、“the pond” という容器内の内容物である残水量が前景化されるならば、残水量の「減算方式」で捉えられるが如くである¹⁹。

ここで、特に問題となるのは「加算方式で捉えられる人工時計時間が形成される根源領域は何か」ということであろうが、認知言語学の枠組みにおける根源領域は日常生活に即したプリミティブなもの（特に身体性や自然物に基づく概念）であること、さらに、人工時計時間が以下（7 a-c）の特徴を有することを鑑みれば、それが「川（の水の流れ）」に由来していることは想像に難くない。

- （7） a. 「時」の経過が「加算方式」で捉えられる。つまり、「時」の位置変化が加算方式で刻々と変化することになる。
- b. 「時」の経過は「直線状」で捉えられる。針時計のような円状のものであっても、本来は直線状のものを円状にただけである。
- c. 「時」の経過は「連続状」で捉えられる。

事実、次の（8 a-b）では、「川の水の流れ」に基づいた時の世界の概念化が図られていることが観察され、そこには TIME IS A RIVER とも言うべき構造のメタファーが存在していることが明らかとなる²⁰。

- （8） a. The river *flows* fast.
- b. Time *flows* fast.

また、「時の流れ」が「川の流れ」に見立てられるからこそ、下記（9）－（10）に示されるように、その流れにうまく乗れることもあれば、逆に時の流れに合わすことができないこともある。

- （9） 時代の流れに乗って、彼の事業は順調にスイスイ進んだ。
- （10） 時代の流れに巻き込まれ／逆行して、彼の事業は不景気の波に呑み込まれた。

さらに、川の流れの到達点が「海」であることを考えれば、以下（11a-b）のような表現が存在しているのも合点がいく。

- （11） a. He labored through the *high seas* of life.
- b. He is the *navigator* of my successful life.

出航が人生の旅立ちとして捉えられ（例：社会人としての船出），荒波を乗り越えることが人生の障害を乗り越えることを意味するのは何ら不思議なことではない。かつて，多重障害を持つヘレン・ケラーは自身の生涯について次の（12）のように表現したが，まさに，ケラーは困難な人生を船旅に喩えながらも，太陽とも言うべき「愛の光」によって目の前の暗闇が晴れ，力強く人生を航海する指針を発見している。

- （12） I was like that *ship*..., only I was without *compass* or *sounding-line*, and had no way of knowing how near the *harbour* was. “Light! Give light!” was the wordless cry of my soul, and the light of love shone on me in that very hour.

— 黒川（編）（1984: 49）（イタリック筆者）

視覚・聴覚・発声の三感覚器官に障害を持ちながらも触覚を通して言葉の美しさを追求し，清らかな愛を理解することで光に満ちた人生という航路を旅したヘレン・ケラーの一生涯も，これまで述べてきた TIME IS A RIVER メタファーを通して捉えられていることが導き出されるのである。

4. スペイン語の前置詞表現に見る時間世界概念化

4.1. スペイン語における時の二重性

言語（表現）という「容器」は相異なっている，それを使用するのは「人間」という同じ生物であり，自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た経験こそが「人間の本質の産物（products of human nature）」に他ならない。そのため，そこには言語の枠を越えた「共通のモノの見方」，すなわち「人間言語文化」が存在する場合も考えられる。下記（1）がその詳細である。

- （1） Each such domain [= a basic domain of experience] is a structured whole within our experience that is conceptualized as what we have called an *experiential gestalt*. Such gestalts are *experientially basic* because they characterize structured wholes within recurrent human experiences. They represent coherent organizations of our experiences in terms of natural dimensions (parts, stages, causes, etc.). Domains of experience that are organized as gestalts in terms of such *natural* dimensions seem to us to be *natural kinds of experience*.

They are *natural* in the following sense: These kinds of experiences are a product of

Our bodies (perceptual and motor apparatus, mental capacities, emotional makeup, etc.)

Our interactions with our physical environment (moving, manipulating objects, eating, etc.)

Our interactions with other people within our culture (in terms of social, political, economic, and religious institutions)

In other words, these “natural” kinds of experience are products of human nature. Some may be universal, while others will vary from culture to culture.

— Lakoff and Johnson (1980 : 117-118) (下線・[] 内表記筆者)

そして、こうした言語観は、たとえば、下記(2)のアリストテレス哲学に示されるような哲学的見地とも直結することになる。

- (2) … 直接に経験される世界は混沌とした印象・表象の世界である。われわれの思考はこの世界のうちに秩序をみつけだす。その思考内容は言葉によって表現され形を与えられる。だから、事物と言葉とは不可分である。逆に、当該の事物について語られる言語の結合を分析しさえすれば、事物の知に到達することができよう。つまり、経騷材料である事物→思考→言語→事物の知のように、認識は円環的に考えられよう。アリストテレスはこのように考え、プラトンが立言形式と関係のないイデアという実在を認めたのとはちがって、どんな表現されない実在も認めなかった。

— 堀田(1991 : 121) (下線・一部省略筆者)

つまり、外界の事物と言葉とは不可分であり、人間の認識は「経騷材料である事物→思考→言語→事物の知」として捉えられるが、言うまでもなく、我々の誰しもが自身の認識体系としてこの「知覚－言語－人知」の密接な結びつきを保持している。それ故、自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た「経験」を基盤に形成された「人間言語文化」の見地に基つけば、スペイン語母語話者の無意識的意識においても、§3で論じた「時の二重性」という同様の概念化を保持していたとしても何ら不思議なことではない。次の(3)－(4)がその実例である。

(3) Al año siguiente se marchó para España.

at the year following (he) left for Spain

→ 英訳 (直訳) : He left for Spain at the FOLLOWING year.

→ 英訳 (意訳) : He left for Spain the *following* year.

(4) Realizó una gran obra en el año precedente.

(He) realized a great work in the year preceding

→ 英訳 (直訳) : He realized a great work in the PRECEDING year.

→ 英訳 (意訳) : He realized a great work in the *preceding* year.

4. 2. 英語の表層構造とは異なるスペイン語の時間表現

— 「到達点への移動経路」概念を通して —

次の (1) に示されるように、スペイン語では「期限」の意味用法として前置詞 *para* が用いられる。さらに、スペイン語前置詞 *para* には、以下 (2) の辞書記載に見られるような意味用法が存在する。

(1) Lo tendré preparado para ocho horas.

it (I) will have prepared by eight hours

→ 英訳 (直訳) : I will have prepared it BY eight hours.

→ 英訳 (意訳) : I will prepare it *by* eight o'clock.

(2) 1 《目的・用途・行き先・適合性》

1 《目的》…のために；((+不定詞 / *que* + 接続法 …する)) ために.

¿P ~ qué sirve esto? これは何の役に立つのですか.

2 《用途》…用の；((+不定詞 …する)) ための.

Quiero un jarabe ~ la tos. 咳止^{せき}めのシロップが欲しい.

3 《あて先》…宛の.

Este paquete es ~ ti. この小包は君宛だよ.

4 《方向・行き先》…の方へ向かって、…行きの.

Iba ~ casa cuando me lo encontré. 家に向かっていたとき彼に出くわした.

5 《適合・利益》…にとって、…のために.

El tabaco no es bueno ~ la salud. タバコは健康によくない.

6 《機能・職能》…のために.

La han contratado ~ secretaria. 彼女は秘書として採用された.

7 《能力》…のための.

Es muy mala ~ la música. 彼女は音楽の才能がない.

2 《観点・基準》

1 《判断基準・対比》…としては.

Esta niña está muy alta ~ su edad. この娘は年のわりにとても背が高い.

2 《意見》…にとっては.

P ~ mucha gente, es un pesado. 多くの人にとって、彼はうっというしい存在だ.

3 《期限・期間》

1 《期限》…までに.

P ~ las ocho estaremos aquí. 私たちは8時までにここへ来るよ.

2 《期間》…分の, …の間の.

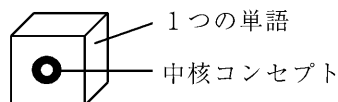
Tengo dinero solo ~ unpar de días. 私は2・3日分のお金しかない.

—『小学館 西和中辞典』(s.v. por, *prep.*) (一部省略筆者)

しかしながら、下記(3)の認知言語学のおよび歴史意味論の見地に基づくと、スペイン語前置詞 *para* が誕生したときには、それが表す概念は1つしかなかったと考えられる。

(3) 人間がある単語を生み出すとき、それはある1つのものを表したいからに他なりません。つまり、「1つ」の単語の誕生時、それはあるもの「1つ」しか指していないのであって、最初から2つも3つも同時に指し示すような働きはなかったと考えられます。ここから、下記(9)の捉え方が導き出されます。

(9) 本来1つの単語には1つの「(派生的意味を生む際に中心的となる)意味」(＝**中核コンセプト**)しかない。



— 森山・福森 他 (2010: 12) (下線筆者)

ここで、以下（４）の疑問が生じる。

- （４）スペイン語前置詞 *para* が誕生したとき、それが表す概念が１つしか存在していなかったとするならば、その概念とは如何なるモノであったのか？

前置詞 *para* の原型と見られる語が用いられている文献²¹には既に複数の意味用法が生じていた事実が確認されるため、（現存する資料を用いた）通時的な観点からだけでは、そのいずれが *para* の原義であるのかを厳密には断定できない。しかしながら、次の（５）に見られる認知言語学および歴史意味論の見地に基づく、*para* の原義を推定することは可能である。

- （５）しかも、自然の森や山に囲まれた昔の人々の生活環境を想像すれば、その中核コンセプトとは目に見えるような素朴な具象物を指し示す意味であったと考えられます。そこから、時の経過によって派生義が発生しました。

— 森山・福森 他（2010: 12）（下線筆者）

換言すれば、メタフォリカルな意味変化の流れは具象物から抽象物へ移り変わるのであって、通常その逆はない。故に、*para* の原義はより具象的なものを指示する意であり、より身体経験に即しているに違いない。このような言語観を採用すると、上出（２）に見られた種々の意味用法の中でも最も具象性を帯びているのは「到達点への移動経路」²²である。その実例として下記（６）を挙げる。

- （６）Voy *para* Valencia esta tarde.

(I) go for Valencia this evening

→ 英訳（直訳）：I go FOR Valencia this evening.

→ 英訳（意訳）：I will go *to* Valencia this evening.

しかしながら、この「到達点への移動経路」が *para* の原義であるとするなら、一つ大きな疑問が生じる。それは以下（７）である。

- （７）如何にして「到達点への移動経路」から「期限」に概念拡張が起こり得たのか？²³

この疑問を解決するために、まずは「到達点への移動経路」を表す前置詞 *para* としばしば比較・対照される前置詞である「到達点」概念表示前置詞 *a* に目を向ける。次の（８）がその実例である。

（８）Voy a Valencia esta tarde.

(I) go to Valencia this evening

→ 英訳（直訳）：I go TO Valencia this evening.

→ 英訳（意訳）：I will go *to* Valencia this evening.

上記（６）と（８）との意味の違いをスペイン語母語話者に尋ねても、筆者の経験上、「同じ意味を表す」という回答内容が得られるばかりであった。しかしながら、まったく同一の意味であるならば、形式（つまり語句の形態）は１つだけの方が言語の経済性に即していると言わざるを得ない。事実、両者の文には以下（９）のような違いがあることが指摘されている。

（９）aが到達点を明示するのに対して、paraはその方向を目指すが、必ずしも到達点には力点がない。Vamos *a* Valencia. では到達点がバレンシアであることがはっきりと示されているが、Vamos *para* Valencia. になるとバレンシア方面に向かうということで、到達点がバレンシアであるということには必ずしもならない。手前で行くのをやめる可能性もある。

— 山田 他（1995: 163）（下線筆者）

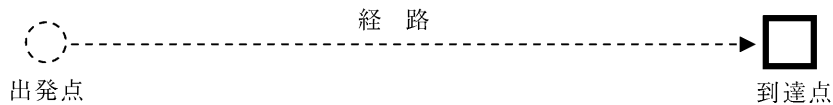
ここで気をつけるべきことは、言語事象の分析には、言語運用（performance）に関する容認性（acceptability）と言語能力（competence）に関する文法性（grammaticalness）とを混同することなく、区別して捉える必要があるということである。確かに、上出（６）と（８）の文は、スペイン語母語話者が回答するように、容認性の点では「２つの文の表す意は同じ」という表面的な見方であろう。しかしながら、文法性、すなわち厳密な意味での語用の点ではやはり「２つの文の表す概念は異なる」と捉えなければならない²⁴。その証拠に、この「到達点」概念表示前置詞 *a* が THE SPATIAL TIME メタファーを通して時間世界の事象に転用されると、下記（１０）に見られるような「（時の流れにおける）或る行為の終着の時点」を表すことになる。

- (10) Entrenamos de cuatro $\left\{ \begin{array}{c} a \\ *para \end{array} \right\}$ siete todos los días.
 (We) train from four $\left\{ \begin{array}{c} to \\ for \end{array} \right\}$ seven all the days
 → 英訳 (直訳): We train from four $\left\{ \begin{array}{c} TO \\ *FOR \end{array} \right\}$ seven all the days.
 → 英訳 (意訳): We train from four $\left\{ \begin{array}{c} to \\ *for \end{array} \right\}$ seven everyday.

つまり、前置詞 *para* と *a* を使用した場合、両者の間には何らかの概念の違いが存在し、その違いこそが「期限」と「時点の終点」という派生義の違いを生じさせる原因になったと考えられる。

まず、「到達点」概念表示語 *a* の概念に注目してみよう。「到達点」概念表示語 *a* の背後には、対義となる「出発点」概念表示語 *de* が存在している。すなわち、“*de* — *a*” で一对の概念を形成している。故に、スペイン語前置詞 *a* の概念は、「到達点」が前景化され、移動のスキーマ (cf. Lakoff and Johnson (1999: 33)) における他の要素が背景化された形で捉えられる。次の (11) がその概念図である。

- (11) スペイン語前置詞 *a* の概念図



他方、前置詞 *para* は、下記 (12) に示されるように、本来「到達点」概念表示語である *a* と「貫通→経路」概念表示語である *por*²⁵ とが合成することによって形成されたと想定されている。

- (12) probablemente alteración del antiguo *pora*, compuesto de *por* y *a*; alteración facilitada por el influjo de la antigua preposición *par*, que se empleaba en juramentos, procedente de la lat. PER.

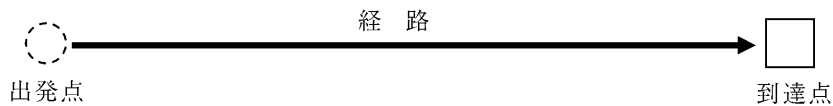
(おそらく *por* と *a* が合成した古形 *pora* の変化したもの。ラテン語 PER から由来した、宣誓文に用いられていた古い前置詞 *par* の影響によってより容易に変化した。)

— *Corominas* (s.v. *para*) (下線・日本語訳筆者)

このことから、前置詞 *para* は前置詞 *a* / *por* 各々が包含する「到達点」／「経路」概念

の両者を吸収したと推測される。また、上出（9）の「Vamos *para* Valencia. になるとバレンシア方面に向かうということで、到達点がバレンシアであるということには必ずしもならない。手前で行くのをやめる可能性もある」という記述から、移動のスキーマにおける *para* の役割として、到達点が必ずしも前景化されていないことが伺える。以上の理由から、*para* の概念図は、「出発点」が背景化され、経路が前景化された次の（13）として描かれることになる。

（13）スペイン語前置詞 *para* の概念図



ここで、当初の疑問（7）への解決に至ることとなる。既に3.2. で「時の二重性」について観察したが、「加算方式」によって捉えると、時は過去から未来に向けて時を刻んでいくことになる。したがって、前出（1）の文においては、「8時を到達点として、その到達点への移動経路に存在するどこかの時点で→8時まで（の或る時点）に私がそれを準備する」と捉えられる。このようにして、「到達点への移動経路」から「期限」へ概念拡張が生じたと考えられるのである。

以上、観察してきたように、スペイン語前置詞 *para* の持つ「到達点への移動経路」から「期限」への概念拡張は、「時の二重性」における「加算方式」を用いて捉えることで、初めてその全容が明らかとなった。この「時の二重性」に関して、Lakoff and Johnson (1999: 148) には以下（14）の記述が見られる。

- （14）The details of the two general metaphors for time are rather different; indeed, they are inconsistent with one another. Take, for example, the *come* of “Christmas is coming” (Moving Time) and the *come* of “We’re coming up on Christmas” (Moving Observer) . Both instances of *come* are temporal, but one takes a moving time as its subject and the other takes a moving observer as its subject. The same is true of *pass* in “That time has passed” (Moving Time) and *pass* in “He passed the time pleasantly” (Moving Observer) .

— Lakoff and Johnson (1999: 148) （下線筆者）

ここでは、“Chirstmas is coming” という表現は「減算方式」として捉えられているが、これは、“We’re coming up a mountain” という事象を“A mountain is coming” と表現するのと同じように、“We’re coming up on Chirstmas” という事象を“Chirstmas is coming” と表現しているだけであると考えられる。換言すれば、“Chirstmas is coming” という表現は、「視点の移動」が加味されることによって、「あたかも（固定された期日である）Christmas（day）が発話者／書き手に向かって移動して拡大する（up）」かのように捉えられる「錯覚」表現であると見なし得る。つまり、“We’re coming up on Chirstmas” と同様、時の刻みに従って時が加算されていく「加算方式」で捉えられているのである。

なお、同様のことはスペイン語にも当てはまり、たとえば次の（15）における“el prazo para presenter la tesis doctoral”（博士論文の提出期限）も本来「固定された期日」上に存在する指示物であるからこそ、その移動の錯覚には話者／書き手の「視点の移動」が適用されることになる。

（15）El prazo para presenter la tesis doctoral está aproximandose.

the deadline to present the thesis doctoral is approaching

→ 英訳（直訳）：The deadline to present the doctoral thesis is approaching.

5. ルーマニア語の前置詞表現に見る時間世界の概念化 — 「分離」概念を通して —

次の（1 a-c）に示されるように、「期間」の意味用法であっても「単数」の時を指示する名詞句が後続する場合、ルーマニア語では前置詞 *de* が用いられる。

（1）a. Nu te-am mai văzut de un an.
no you (I) have more seen off a year

→ 英訳（直訳）：I have not seen you OFF a year.

→ 英訳（意訳）：I have not seen you *for* a year.

b. *Nu te-am mai văzut cu un an.
no you (I) have more seen with a year

→ 英訳（直訳）：*I have not seen you *with* a year.

c. *Nu te-am mai văzut pentru un an.
no you (I) have more seen for a year

→ 英訳（直訳）：*I have not seen you *for* a year.

それに対し、下記（2 a-b）に示されるように、複数の「時」が対象となる場合は、un an (a year) の複数形 ani / anii が、cu / de いずれにも後続可能となる。

- (2) a. Nu te-am mai văzut $\left\{ \begin{smallmatrix} cu \\ de \end{smallmatrix} \right\}$ ani buni.
no you (I) have more seen $\left\{ \begin{smallmatrix} with \\ off \end{smallmatrix} \right\}$ years many
→ 英訳 (直訳) : I have not seen you $\left\{ \begin{smallmatrix} WITH \\ OFF \end{smallmatrix} \right\}$ many years.
→ 英訳 (意訳) : I have not seen you *for* many years.
- b. Nu te-am mai văzut $\left\{ \begin{smallmatrix} cu \\ de \end{smallmatrix} \right\}$ anii.
no you (I) have more seen $\left\{ \begin{smallmatrix} with \\ off \end{smallmatrix} \right\}$ the years
→ 英訳 (直訳) : I have not seen you $\left\{ \begin{smallmatrix} WITH \\ OFF \end{smallmatrix} \right\}$ the years.
→ 英訳 (意訳) : I have not seen you *for* years.

こうした容認度の差を生じさせる cu / de の使い分けのメカニズム (= (1 a-c)), および、同一文で cu / de を用いた場合の概念的差異 (= (2 a-b)) を明らかにするために、まずは de のメタ・プロセスに着目してみよう。

下記 (3) に示されるように、de はいわゆる「奪格」概念表示前置詞であるが、(1 a) における de の意味用法は英語だけを学習した者にとっては特異な語法に感じられるに違いない。なぜなら、英語では “*I have not seen you *off* / *from* a year.” と表し得ないからである。

- (3) A sărit de pe acoperiș.
(he / she) jumped off on roof
→ 英訳 (直訳) : He / She jumped OFF [the surface] on roof.
→ 英訳 (意訳) : He / She jumped *off* the roof.

そこで、de の中核概念をより明確にするために、物理的事象に言及する次の (4) に注目する。

(4) Merg de la școală la spital în fiecare zi.

(I) walk off at school $\left\{ \begin{array}{c} at \\ to \end{array} \right\}$ hospital in every day

→ 英訳 (直訳): I walk OFF AT school $\left\{ \begin{array}{c} AT \\ TO \end{array} \right\}$ hospital in every day.

→ 英訳 (意訳): I walk *from* the school to the hospital every day.

上記 (4) に示されるように、物理的事象表示で英語前置詞 *from* の概念に相当する表現としてルーマニア語では “*de la*” が用いられる。英語では通常、奪格概念表示に *from* か *off* が宛がわれるが、ルーマニア語 *de* の概念は後者 *off* のそれに相当すると言わざるを得ない。なぜなら、上記 (4) に見られる *la* は本来、英語前置詞 *at* の概念を包含する「0次元」概念表示前置詞として捉えられるからである (cf. *DELR* (s.v. *la*, *prep.*))。つまり、*de* が「1 – 2次元物からの分離 (OFF)」概念を表示するが故に、(4) では、*la* の力を借りることにより、「出発点」として「0次元」化させる必要があると考えられる (cf. Moriyama (2011))。事実、下記 (5) の *de când* (*când* は文頭で用いると *cînd*) は文字通りは ‘off when’ と訳されるが、ここでの *when* が本来 “at the time when” として *at* の概念を内包していると考えれば、*la* が用いられないのも合点がいく²⁶。

(5) De când m-am măritat m-am, lăsat de fumat.

off when (I) have married (I) have quited of smoking

→ 英訳 (直訳): OFF WHEN I have married, I have quited of smoking.

→ 英訳 (意訳): *Since* I got married, I have quited smoking.

また、(4) の *de la* の概念が時間世界にまで拡張した実例が以下 (6) である一方、(5) の *de când* に [+ *affair*] としての出来事を表示する名詞句が後続する場合は、その出来事を述部の事象に「同伴」させるために (7) の “*de când cu*” がその姿を現す²⁷。

(6) De la accidental de ieri, nu mai pot vedea cu ochiul stâng.

off at the accident of yesterday not more (I) can see with the eye left

→ 英訳 (直訳): OFF AT the accident of yearsterday, I cannot see with my left eye.

→ 英訳 (意訳): $\left\{ \begin{array}{c} Since \\ From \end{array} \right\}$ the yesterday's accident, I cannot see with my left eye.

(7) De când cu accidental de ieri, pietonii nu mai traversează pe roșu.
 off when with the accident of yesterday the pedestrians no more cross on red

→ 英訳 (直訳): OFF WHEN WITH the accident of yesterday, the pedestrians do not cross on red anymore.

→ 英訳 (意訳): *Since* the yesterday's accident, the pedestrians do not cross on red anymore.

前出 (1 a) における *de* とこの (6) における *de la* との語法上の差異は、後者が [+affair] としての出来事を表示する名詞句が後続することによるが、上出 (4) と同様、抽象世界においても出発点として与格名詞句の指示物を一点化する認識が関っている。ここで重要なことは、裏を返せば、前出 (1 a) が表す事象における *un an* (a year) の指示物は一点化された単なる出発点として概念化されているわけではない、ということである。事実、以下 (8) においては、*de la* の使用は容認されない。

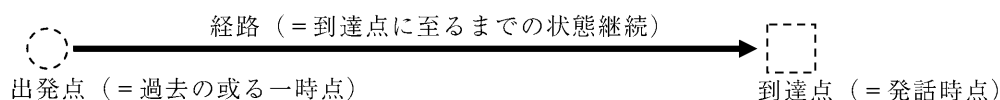
(8) Nu te-am mai văzut $\left\{ \begin{array}{l} *de \\ de\ la \end{array} \right\}$ un an.
 no you (I) have more seen $\left\{ \begin{array}{l} off \\ off\ at \end{array} \right\}$ a year

→ 英訳 (直訳): I have not seen you $\left\{ \begin{array}{l} OFF \\ OFF\ AT \end{array} \right\}$ a year.

→ 英訳 (意訳): I have not seen you $\left\{ \begin{array}{l} for \\ *from \end{array} \right\}$ a year.

以上の見解に基づくと、前出 (1 a) および上記 (6) の *de* の概念はやはり、英語前置詞 *off* の概念に相当し、前出 (4) に見られるような概念をそのプロトタイプ拡張の根源領域としている。さらに、この「1-2次元物からの分離」概念を前提に時間世界の次元を考えると、通常、「線状」の1次元物がその対象となっていると捉えるのが論理に適う。「線状」が姿を現すのであれば、必然的に「(過去から未来に向かう) 時の流れ」が考慮されることは言うまでもない。詰まるところ、*de la* ではなく *de* が用いられているのは、§ 3 で観察した「(過去から未来に向かう) 時の流れ」を前景化させるためであり、かつ、*de* の中核には「分離」概念が据えられているのだから、時間世界に *de* を用いた場合はその副作用として上出 (6) で *de la* を用いた事象ほどの出発点そのものの前景化が引き起こされない。故に、前出 (1 a) および上記 (8) の *de* の概念は、「経路」認識だけが前景化された次の (9) 図として描かれることになる。

(9) 時間世界に言及する事例で de を用いた認識



ただ、ここで問題となるのが下記 (10) のような事例である。

- (10) ani / anii いずれであっても、「複数」の時を指示する名詞句が後続する場合、cu / de の双方が使用可能となる。その場合、それぞれの概念的差異は如何なるものか？

ルーマニア語文法上、ani は英語でいう無冠詞複数形の years に相当するのに対し、anii は限定詞概念を含んだ複数名詞句、すなわち英語でいう the years に相当する。それ故、限定詞概念を包含しない ani については、(口語では表現可能であるものの) フォーマルには ani を修飾する形容詞句が後続しない限り、“*de ani” とは表現されない。したがって、前出 (2 a-b) では、cu / de 共に ani / anii と共起可能となる。このような条件の下、上出 (9) の認識図に基づくと、de を用いた場合は複数の時の流れが浮かび上がる。一方、cu の中核には「同伴」概念が据えられているのだから、そこには時の流れを示唆する連続走査 (sequential scanning) が機能する余地はない²⁸。事実、以下 (11) における容認度の結果からは、de / cu それぞれの概念的差異が生じていることが観察される。

- (11) Nu am mai mâncat carne $\left\{ \begin{array}{c} de \\ *cu \end{array} \right\}$ mulți ani.
 no (I) have more eaten meat $\left\{ \begin{array}{c} off \\ with \end{array} \right\}$ many years
 → 英訳 (直訳) : I have not eaten meat $\left\{ \begin{array}{c} OFF \\ *WITH \end{array} \right\}$ many years.
 → 英訳 (意訳) : I have not eaten meat $\left\{ \begin{array}{c} for \\ *with \end{array} \right\}$ many years.

なぜなら、(11) では de によって 1 年 1 年の複数の時の流れに沿った「状態の継続」が前景化し、それら複数の経路認識が連なることにより、「多年；長年」の事象が表されることになるからである。つまり、次の (12) に示されるように、その経路認識が trecuti などの力を借りてより明確になるのであれば、なおさら de との相性が良く、時の流れを強く感じさせる「状態の継続」概念が上出 (9) の連続走査によって増幅されるのである²⁹。

(12) $\left\{ \begin{array}{c} De \\ *Cu \end{array} \right\}$ anii trecuți prețul la carne s-a mai scumpit.

$\left\{ \begin{array}{c} \text{off} \\ \text{with} \end{array} \right\}$ the years past the price at meat got (itself) more expensive

→ 英訳 (直訳): $\left\{ \begin{array}{c} \text{OFF} \\ * \text{WITH} \end{array} \right\}$ the past years, the price at meat got itself more expensive.

→ 英訳 (意訳): *For* the past years, the meat's price got more expensive.

6. おわりに

本稿では、まず、多くの日本人が中学校・高等学校における6年間の教育課程で学習する外国語である「英語」の諸表現を契機に、§2では「次元」を通した時間世界の認識を、また、続く§3では「減算方式」と「加算方式」という2つの方式による時間世界の認識と互いの概念的結びつきを観察した。その上で、§4では英語と同様、スペイン語にも「時の二重性」が存在していることを確認する一方、英語では同種の中核概念（およびそれに基づくメタ・プロセス）表示語が観察されないスペイン語前置詞 *para* を取り上げ、その意味拡張のメカニズムには§2－§3で観察した同様の認識が密接に関っているという妥当的説明を与えた。このような人間言語文化がルーマニア語の諸表現にも観察されることを論じたのが§5である。そこでは、表面上は英語と異なる「分離」概念表示語が用いられていても、その根底には§2－§3で導き出された時間世界の認識システムが図地分化によって生じているプロセスを観察した。ここに、人間の本性の産物としての「人間言語文化」（＝国境のない言語文化）と、各社会文化圏との相互作用によって生じる「民族言語文化」（＝国境のある言語文化）への相互理解を深めるための言語文化教育の基盤が提示されることになる。

本稿は「時の認識」の実像を複数言語の観点から明らかにしたが、その中で唱えた主義・主張は言語学研究の枠組み内に留まるだけではない。国境線を前提としながらも人々やモノ・情報が自由に行き交う「多文化社会」では、様々な「衝突」が生じ得ると考えられる。国際社会で活躍する人材を育成するには、そうした衝突に対応し得るだけの教育、つまり、多様な価値観・概念・認識にまで理解を及ぼそうとする新しい外国語学習としての「言語文化教育」が求められると信じて止まない。自戒の念を込めて言っている³¹。

本稿も終わりに近づいてきた。次の記載でもって結びとしたい。

(1) a. また「ユネスコ国際教育指針一九九一」では国際理解教育を「未来の教師のための必修科目にすべき」としているにもかかわらず、それを学生全員の必修科目にしている教育学部を私は知りません。岐阜県は、在日韓国朝鮮人、企業研

研究生として来日する中国人、出稼ぎの日系ブラジル人などが在住し、「多文化共生」が急務のはずですが、私の勤務する教育学部でも「異文化理解」は英語を専攻する学生の必修科目にすぎません。

— 寺島 (2009: 18)

- b. つまり、「英語は世界語だ」と信じている英米人はあまり外国語を勉強せず世界のことも良く知らないし、「英語は世界語だ」と信じて英語を必死に勉強している日本人も（英語を使う場が限られているだけでなく）アメリカ人の目で世界を見るように仕組まれているために逆に世界が見えません。… これでは、チョムスキーが言うように、情報操作・報道操作（Media Control）の罠にはまり、「合意の捏造」（Manufacturing Consent）をそのまま受け入れて、英語を学べば学ぶほど「英語バカ」になっていく恐れさえあります。何のために英語を学ぶのかの再考が今日ほど切実に求められているときはないように思えます。

— 寺島 (2009: 36-37) (一部省略筆者)

注

- 1 本稿の執筆分担は、森山が§ 1を、福森が§ 6を、そして森山・福森が§ 2－§ 5を担当する。
- 2 見田宗介氏は同書の著者クレジットとして「真木悠介」を用いている。なお、これら4つの時間感覚について詳しくは森山・福森 他 (2010: 348-355) 参照。
- 3 「時間」と表現すると、「時」という抽象物が「空間」という具象的场所概念によってすでにメタファー化された認識を表してしまうが、本稿では便宜上、「時」を「時間」として論を進める。
- 4 「空間関係づけ (spatial relationship)」について詳しくは Lakoff and Johnson (1999: 34-36) 参照。また、現象学の観点も交えた「人間言語文化」の観点について詳しくは Lakoff and Johnson (1980: 117-118) 参照。なお、本稿 § 4－§ 5でスペイン語・ルーマニア語各々の言語実例を採用した理由は、英語はゲルマン語族に属するものの、以下 [1] にも見られるように、Norman Conquest 以降、1万語もの語彙がラテン語から借用された事実から、ラテン語由来言語との比較・対照がローマ・アルファベット言語圏における母語話者の認識を浮き彫りにしやすいと考えたことによる。

[1] ノルマン人の征服以前に英語に入ってきたフランス語は castle 「城」,

pride「誇り」, tower「塔」など数語にすぎなかったが, 13世紀初めから徐々に増加し, 1350-1400年に頂点に達した。中英語期だけでじつに1万語もの借入語が英語に入ってきて, しかもそのうち7500語が今日の語彙に残っている。

— 中尾 (1989: 59) (下線筆者)

個別に言えば, スペイン語はフランス語と同様, ラテン語から派生したイタリック語派に属する言語である。そこで, このフランス語語彙を介するようにして, スペイン語と英語との間に語の形とその意味との類似性が顕著に観察されると考えられる。他方, ルーマニア語はギリシア語・スラブ語・ハンガリー語・トルコ語・フランス語などの借用語彙が多く, かつ, 文化的にローマ・カトリックの影響をほとんど受けていない特異な言語であることから, ローマ・アルファベット言語の中でも比較的英語と異なる言語として時間概念の異同を参照するのに大きな役割を果たすと考えられる。

- 5 本稿で用いられているすべてのスペイン語・ルーマニア語実例は, それぞれの母語話者のチェックを受けている。また, それらスペイン語・ルーマニア語実例における各々の単語には英単語グロッサリを付加し, 適宜, その全文の直訳／意識となる英訳を記載する。
- 6 ルーマニア語では, a urma, urmă, în urma, în urmă はそれぞれ, 英語でいう to follow, track / trace, behind, ago の概念に相当する。つまり, urma は本来「後方」概念を示すものの, în urma, în urmă に見られるように, 物理世界と抽象世界でそれぞれ, “-a” と “-ă” を使い分けていることが観察される。
- 7 “I aimed the rifle carefully *at* the bird.” に見られるような at にも同様の概念が反映されている。
- 8 “She is *at* church now.” に見られるような at の概念拡張について詳しくは森山・福森 他 (2010: 115-120) 参照。また, at はその抽象性故に, 抽象名詞句との共起関係が数多く確認される。詳しくは森山・福森 他 (2010: 120-122) 参照。
- 9 「0次元」認識を基にした at の意味変化の妥当性は数学的観点からも支持される。詳しくは森山・福森 他 (2010: 141-146) 参照。
- 10 IN CONTACT WITH, SUPPORTED BY, ABOVE の3つの意味要素が反映された典型的な文として “She leaned *on* [against] the wall.” のような文が挙げられる。なお, ここでの ABOVE は「方向性」を述べているだけであって, いわゆる英語前置詞 above の概念とは異なる。また, “There is a fly *on* the wall.” のような文が表す事象には「視点の移動」が反映されており, 壁を地面に見立てることによって ABOVE の方向性が保持されている。

- 11 したがって、ここでの「1時間の形態で；1時間を利用して」というのは、「1時間経って；1時間ちょうどで」が通常の解釈である。それ故、「1時間後に（＝1時間経過すればそれ以降はいつの時点でも言及可能）」を示したければ，“I finished it *after an hour.*”のように表さなければならない。
- 12 “She sat *on / in* the chair.” や “She was standing *at / on / in* the corner of the room.”, “He knocked *at / on* the door.” など、次元の観点から見たそれぞれの前置詞句表現の概念的差異について詳しくは森山・福森 他（2010: 130, 137-138, 139）参照。また、地理的要因の観点も加味した “He walked *on / in* the street.” の概念的差異について詳しくは森山・福森 他（2010: 131）を、乗物名詞句との共起関係に関する “get *on / in*” の語用のメカニズムについて詳しくは森山・福森 他（2010: 131-132）, Moriyama（2011）を参照。
- 13 現実世界では複数の空間が集まっても3次元のままである。ということは、時の世界でも、空間以上の次元はない。したがって、week, month, year, century…といくら時間単位が増えても、通常 *in* と結びつくことになる。
- 14 “She was [*in* the state of] jogging.”（彼女はジョギングをしているところであつた）のように、同様の認識は異言語間に渡っても観察される。詳しくは森山・福森 他（2010: 140）参照。
- 15 Lakoff and Johnson（1999: 137-169）においても同様の論が展開されている。
- 16 詳しくは § 4 – § 5 にて詳述。
- 17 中国語で未来を「下」、過去を「上」で表す場合があるが、その方向性はカレンダーに代表される「暦」に基づく。
- 18 <>内の数字はそれぞれ、当該映画内から引用したセリフが生起する<時間・分・秒>を示す。以下同様。
- 19 さらに詳しくは上野（近刊（2012））参照。
- 20 「視覚」（場合によっては「触覚」）もしくは「聴覚」を通して認識される「川の水の位置変化」が watch, clock 各々のメタ・プロセスと密接に関与している。詳しくは、森山・福森 他（2010: 339-340）参照。
- 21 前置詞 *para* の原型ともいえる形は *pora* で、Mil. では 760c, 833b, 884c に、S. Mill. では 487 をはじめ随所に、Alex. では 11, 42, 203 などに見られる（cf. *Corominias* (s.v. *para*））。
- 22 本論 4. 2. （2）では「方向・行き先」となっているが、以下 [1 a-b] に見られるように、

[1] a. Voy *hacia* Valencia. (私はバレンシアの方へ行く)

b. ¿Vais *hacia* la estación? (君は駅の方へ行きますか?)

「方向」概念を表す前置詞は *hacia* であることから、その厳密な区別を行うために「到達点への移動経路」という表現を用いた。なお、「到達点への移動経路」と定義したのは、前置詞 *para* が「到達点に向けて移動する TR の移動経路」に焦点を当てる役割を持っていることによる。

- 23 一方向性の仮説 (unidirectional hypothesis) の流れ、すなわち物理的事象から抽象的事象への意味変化の流れに基づけば、「期限」から「到達点への移動経路」への概念拡張は考え難い。
- 24 このように、一見「同義語」と思われる表現群であっても、ネイティブは自分の母語を無意識の内にその違いを使い分けていることから、「同じ意味である」や「何か違いはあるような気はするが、その違いが何かまではわからない」という主旨を述べることが多い。日本語母語話者を対象に言語調査を行ったときでさえ、たとえば「彼はその山に／をのぼるつもりだ」のように、各々の助詞を用いた場合の概念的相違を答えられるインフォーマントは限りなく少なかった。両者の違いについて詳しくは森山・福森 他 (2010: 10-12) 参照。
- 25 前置詞 *por* の「貫通」概念と「経路」概念との結びつきについて詳しくは福森 (2007: 79-85) 参照。
- 26 なお、ルーマニア語前置詞 *din* の中核概念は英語前置詞句 *out of* のそれに相当。
- 27 なお、§ 5. の (6) に見られるような *de la* は完了相とは共に用いられない。
- 28 ルーマニア語前置詞 *cu* のメタ・プロセスおよび時間名詞句との概念的結びつきについて詳しくは森山 (近刊) 参照。
- 29 ルーマニア語前置詞 *pentru* のメタ・プロセスおよび時間名詞句との概念的結びつきについて詳しくは森山 (2011) 参照。
- 30 国際社会のグローバル化が進む中、我が国では外国語教育の必要性が叫ばれて久しい。しかしながら、その「外国語」とは、実質的には「英語」を指しているのであり、英語以外の外国語はまるでその範疇に属していないのではないかという違和感を禁じ得ない (cf. 「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について」(2002 年)・「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」(抜粋) (2003 年) (いずれも文部科学省))。ここで誤解が無きよう述べておくと、これは何もスペイン語やルーマニア語といった外国語を学習する機会を単に増やすべきだと言っているわけではない。筆者も英語学習の重要性は理解している。ただ、「学習者の視点」に立った外国語教育とは何か、を問うているだけである。グローバル化とは、既存の国境を前

提としながらも、交通手段や情報技術を利用して人・モノ・情報が大量に世界中を駆け巡るようになることである。また、日本国内における外国人登録者の内訳（国別）に目を向けても、2009 年末現在の統計で、中国が 68 万 518 人（31.1%）、韓国・朝鮮が 57 万 8495 人（26.5%）、ブラジル 26 万 7456 人（12.2%）、等となっており、韓国・朝鮮・中国で約 57.6%を占めている（cf. 矢野恒太記念会（編）（2011: 56）。なお、日本国内における外国人登録者は、フィリピン（9.7%）、ペルー（2.6%）、アメリカ合衆国（2.4%）、その他（15.5%）の順に続く）。このような状況下、学習者個々の「夢」や「目標」を前提にした外国語教育であったのか、多文化社会において想定される「衝突」に対応し得るだけの外国語教育であったのか、我々は真摯に向き合わなければならない局面を迎えている。ツールとしての外国語学習を唱えるのであれば、その前提としてそれを活用するだけの「夢」や「目標」をまずもって設定しなければならない。言うまでもなく、それは個々によって異なるのであるから、学習者の必要性に応じて（出来得る範囲での）種々の外国語教育を等価値で実施する態勢を整えていかなければならない。外国語教育に「プラクティカル」を唱える場合も同様のコンテクストに含まれる。また、国内外を問わず、外国人との接触機会が増える時代を迎えるから外国語教育が必要だと唱えるのであれば、個別の学習者にとってその外国人とは一体どの国のこういった人たちを想定しているのかも問われなければならない。

〈主要参考文献〉

＜学術図書・学術論文＞

- Quirk, R. et al. (1974) *A Grammar of Contemporary English*. (5th impression (corrected)) London: Longman.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh — The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought* — . New York: Basic Books.
- Moriyama, T. (2000) *A Cognitive Approach to the Concept of TIME*. Master's thesis. Kyoto: Kyoto University of Foreign Studies.
- Moriyama, O. (2006) *Influența Mass-mediei asupra Comportamentului Adolescentului*. Brașov: Universitatea Transilvania, Facultatea de Psihologie și Științe ale Educației.

- Moriyama, T. (2011) “A Cognitive Teaching Way of English for Japanese Students — through the Concepts of English Prepositions —.” In Asociatia Decultura Argedava, ed. *Omul și Societatea*. (2nd session) pp.17-24, Pitești: Asociatia Decultura Argedava.
- [Alex.] : Willis, R. S. (ed.) (1250 (1934)) *Libro de Alexandre*. Princeton.
- [Mil.] : Barceo, Gonzalo de (1922 (ed. Solalinde, M.) , 1928-9 (ed. Marden, M.)) *Milagros de Nuestra Señora*.
- [S. Mill.] : Barceo, Gonzalo de (1928 (ed. Parcial de Marden, M)) *Historia del señor San Millán*.
- 上野義和 (近刊 (2012)) 「英語動詞 R U N の研究 (その 8) — 意味変化と概念化 — 」
SELL 28 号, 京都外国語大学英米語学科研究会: 京都.
- 黒川泰男 (編) (1984) *Essays on Language*. 桐原書店: 東京.
- 寺島隆吉 (2009) 『英語教育が亡びるとき — 「英語で授業」のイデオロギー — 』明石書店: 東京.
- 中尾俊夫 (1989) 『英語の歴史』(講談社現代新書 958) 講談社: 東京.
- 福森雅史 (2007) 『異言語間における動作主導入前置詞の概念研究 — スペイン語・ポルトガル語・英語を通して — 』(大阪大学言語社会学会博士論文シリーズ Vol. 42)
大阪大学言語社会学会: 大阪.
- 福森雅史・高橋紀穂「言語学と社会学のインターフェイスに基づく「前方-交換」概念の研究 — 語彙概念の導入による効果的な語彙習得へのアプローチ — 』『語学教育部ジャーナル』第 5 号, pp. 27-45, 近畿大学語学教育部: 大阪.
- 堀田彰 (1991) 『人と思想 6 アリストテレス』清水書院: 東京.
- 真木悠介 (1981) 『時間の比較社会学』岩波書店: 東京.
- 森山智浩 (2011) 「ルーマニア語前置詞 *prin* と英語諸前置詞との概念比較研究 — 認知言語学と言語文化のインターフェイス — 』『近畿大学文芸学部論集 文学・芸術・文化』第 23 巻 第 1 号 (通巻第 50 号), pp.134-98 (115-151), 近畿大学文芸学部: 京都.
- 森山智浩 (近刊) 「ルーマニア語前置詞 *cu* と英語前置詞 *with* との概念比較研究 — 認知言語学と言語文化のインターフェイス — 」.
- 森山智浩・福森雅史 他 (2009) 『FD 改革下における語学教員への 7 人の新提案 — 認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から — 』星雲社: 東京.
- 森山智浩・福森雅史 他 (2010) 『英語前置詞の概念 — 認知言語学・教育学・社会学・心

理学・言語文化学の学際的観点から ― 』（FD 語学教育改革シリーズ 1）ブイ
ツーツソリューション：愛知.

矢野恒太記念会（編）（2011）『日本国勢図会 2011 / 12 年版』矢野恒太記念会：東京.
山田善郎 他（編）（1995）『中級スペイン文法』白水社：東京.

< 辞書 >

[*Corominas*] : Corominas, Joan & José A. Pascual (1980) *Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico*. Madrid : Editorial Gredos.

[*DELR*] : Alexandru, C. (ed.) (1978) *Dicționarul Etimologic Al Limbii Române*. I. O. București : Saeculum.

[*DER*] : Panovf, I. (ed.) (1978) *Dicționar Englez Român*. București : Editura Științifică și Enciclopedică.

[*DRAE*] : Real Academia Española (2001) *Diccioario de La Lengua Española*. (Vigésima segunda edición) Madrid : Editorial Espasa Calpe.

[*DRE*] : Bantaș, A. (ed.) (2006) *Dicționar Român Englez*. București : Editura Grammar.

井上永幸・赤野一郎（編）（2003）『ウィズダム英和辞典』三省堂：東京.

北原保雄（編）（2003-2004）『明鏡国語辞典』大修館書店：東京.

桑名一博 他（編）（2007）『小学館 西和中辞典』（第 2 版）小学館：東京.

小西友七・南出康生（編）（2002）『ジーニアス英和大辞典』大修館書店：東京.

寺澤芳雄（編）（1999）『英語語源辞典』研究社：東京.

新村出（編）（1998）『広辞苑』（第 5 版）岩波書店：東京.

山田善郎 他（編）（2004）『現代スペイン語辞典』（改訂版）白水社：東京.

山田善郎 他（編）（2004）『和西辞典』（改訂版）白水社：東京.

< DVDs >

Jimmy Neutron: Boy Genius（邦題：『天才少年ジミー・ニュートロン』）（2001: Paramount Pictures)

Snow Falling on Cedars（邦題：『ヒマラヤ杉に降る雪』）（1999: Avenue Pictures Productions)

なお、文部科学省関連の資料は以下のホームページのものを参照した（アクセス：2011年6月20日）。

- ・「「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について」（2002年）：

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm

- ・「「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」（抜粋）（2003年）：

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryo/attach/130